

[書評]
 今野真二著
『日本語の考古学』
 岩波新書、2014年4月18日発行

経営ビジネス学科
 橋 富 博 喜



連休前、そして面白くて一気に読み通すことができた。私は国語、国文学、国史を専門に学んだわけではないが、随分昔の受験勉強や、大学時代の講義のなかで、あるいは時々の必要に迫られて古典文学の世界を垣間見たこともあった。しかしそうした表面的な古典文学の理解とは異なる研究が、この書物のなかには記されている。

著者はその書名に用いた「考古学」を、「(具体的な)モノを通して」過去の文化を考える学問だということではないだろうか」と記す。そこでこの書物が対象とするのは、「かつて誰かが手で書き写した、あるいは活字を用いて印刷した、具体的なモノとしての書物である」という。目指すところは、「穏やかなことばで過去の日本語のありようを語ってみる」ことでもある、ともいう。その考えに従って、日本文学の古典作品のいくつかをとりあげ、「日本語のありよう」を探っていくことになる。具体的に見てみよう。

私の机のうえには数冊の辞書・辞典がのっている。国語関係で言えば、やや古くなったが『広辞苑』(第二版補訂版)、『新装改訂 新潮国語辞典—現代語・古語—』の二冊、漢字の辞書は『大修館 新漢和辞典 改訂版』、それに美術作品の落款印章や面賛を読み解くための、『五體字類 改訂第二版』、『必携 篆書印譜字典』、『必携落款字典』、そして近頃使うことが多くなった関連する古文書を読むための『くずし字用例辞典 普及版』などである。日本の美術史をあつかう領域には最小限の辞書類であろう。それぞれの専門で研究の対象となる事物によって手元におくべき辞書類は異なるのであろうが、私の場合いまのところこれらの辞書類は日常的な事柄を調べるのに不足はない。

近年インターネットの世界がひろがり、ほとんどの事柄を「いちおう」検索することができるようになって便利にはなったが、その情報に全幅の信頼を寄せせることは、まずあり得ない。古くさいといわれようが、紙に書かれたあるいは印刷された文字の情報がまだ信頼できる。言葉への関心は常に持ちつづけてきたが、それ以上のことを追求する方法を避けてきた。やはり餅は餅屋にということであるろう。

今回紹介する書物『日本語の考古学』は、その帯の甚句に大きな文字で「過去の日本語の声を聞く」と書かれている。なにこれ?と思うて手に取って見たのが

例えば第二章でとりあげられる『源氏物語』のくだりが面白い。私たちは『源氏物語』について、その作者は誰かという問いかけには、だれもが「紫式部」というだろうが、では書いたのは誰か、とのさらなる問いかけにはすこし躊躇しながらも、「紫式部」と言えるかどうか、はなはだこころもとない。いわゆる紫式部自筆の『源氏物語』原本が存在しない、またいつかの時代にそれがあつたとされる記述もない、ということから、現在の『源氏物語』は、藤原定家がかかわった写本を「おそろく」原本に最も近いと判断して、翻字刊行されているのである。物語の場合、作者が記述したのち、多くの場合複製が作成されていく。その複製から写本が、さらに写本から複製がという風に拡大していく。そういう作業のなかで、「写し間違い」が生じるのは不思議ではない。細かいところは本書に譲るが、そうした複数のテキストを校正しながら、現在の『源氏物語』は成立しているのである。そうなる紫式部が『源氏物語』を「書いた」とは、だれも自信をもつて言えないであろう。

この章のさいごに著者は古典文学ではそういうこともあり得るが、では近代文学ではどうなのかを検証している。とりあげたのは夏目漱石の『こころ』の一節で、大正三年の単行本と、現在各社から発行されている文庫本とを比較検討している。そのなかで単行本のなかの「さうして」という語を、ある文庫本は「そして」に置き換えていることを指摘し、このふたつの語は別の語であり、「厳密にい

えば『本文』を変えたことになるであろう。『作者』を、テキストの改変ができる唯一の人と定義すれば、このテキストの作者は誰ということになるのだろうか」と疑問を呈している。近時問題となっているコピーアンドペーストのことも指摘する。

このほか本書で取りあげられた古典は、『万葉集』、『土佐日記』、『平家物語』などであり、さらに日本語表記における「行」の問題や和歌の行替え、誤写のことが記されている。そして最後に、「わたしたちは今生きている状況において育まれた価値観にしたがって、抽象的な面もふくめて、物事を見たり判断したりする。それは当然のことであり、悪いことではないが、前提としてそのことをきちんと自覚しないと、つねに現代をよとした基準によって（過去の事物まで含めた）あらゆることがらを判断してしまうことになる。現代を基準として過去を認識しようとする、見損なうことも少なくない」という。文学作品だけでなく、私のおつかう美術作品でも、歴史のなかで論じようとするときに忘れてはならない姿勢であろう。肝に銘じておきたい。